優しい悪魔

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しい悪魔

【Ｎコード】
Ｎ６５１３Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
心優しい女の子美代子のところに一人のおじさんがやって来ました。おじさんは美代子に三つの御願いを適えてあげると言いました。美代子が御願いしたこととは。童話です。よくある御願いのお話です。

第一章

優しい悪魔

美代子はとても優しい女の子でした。

それでいつも皆が幸せになることを考えていました。そういう女の子です。

だから皆から好かれています。誰も美代子が大好きです。

「みよちゃんみたいな娘本当にいるんだね」

「そうよね。まるでマリア様みたい」

「とてもいい娘よね」

皆こう言って彼女を褒めます。けれど本人はそんな褒め言葉を聞いてもそれに慢心することなくです。皆の幸せを願って親切な行いを続けるのです。

そんな彼女ですがある日自分のお部屋でぬいぐるみをだっこして遊んでいたその前にです。シルクハットに燕尾服の小柄なおじさんが来ました。

そのおじさんはです。美代子の前に来てです。優しい声でこう言ってきました。

「君が美代子ちゃんだね」

「はい、そうです」

美代子はその手にうさぎのぬいぐるみを抱いたままにこりと笑って答えました。

「柏木美代子。小学校一年生です」

「そうだね。間違いないね」

おじさんは美代子の言葉を受けてにこりと笑ってみせました。

「それはね」

「私嘘つきません」

美代子ははっきりとした声でまた答えました。

「何があっても」

「そうだね。その正直で優しい美代子ちゃんの為にね」
「私の為に？」
「三つの願いごとを適えてあげるよ」
にこりと笑ってこう言うのでした。
「三つのね」
「御願いですか」
「そう。何でも好きなことを言ってみて」
また美代子に対して言ってきました。
「美代子ちゃんの好きなことをね」
「三つですか」
それを聞いてです。美代子は少し考える顔になりました。そうしてまずはこう言ったのです。
「あのお隣の山田さんですけれど」
「山田さんがどうしたのかな」
「はい、今奥さんが病気で大変なんです」
おじさんに対してこのことをお話するのでした。
「ですから奥さんの病気を治して下さい」
「自分のことはいいのかい？」
おじさんは美代子に対してこのことを尋ねました。
「美代子ちゃんのことはいいのかい？」
「奥さんを御願いします」
けれど美代子の言葉は変わりません。まずは奥さんをだというのです。
「山田さんのお家今とても大変ですから」
「わかったよ。それじゃあね」
おじさんは美代子の言葉に頷きました。そしてです。
右手に先が黒い月になっているステッキを出してきてです。それをさっと下から上に弧を描いて動かしました。そしてそれからまた美代子に尋ねてきました。
「二番目の御願いは何かな」

「二番目ですか」
「今度も好きなことを言ってみて」
言葉は同じでした。
「何でもね」
「わかりました」
おじさんの言葉をまた聞いてです。美代子は言いました。
「それじゃあ次はですね」
「うん、次は？」
「学校の真北先生に車を御願いします」
「その先生に車を？」
「車が欲しいのに中々買えないんです」
おじさんにその事情を話すのでした。
「それで雨の日も風の日も自転車で。可哀想ですから」
「それで車をなんだね」
「御願いします」
美代子はおじさんの顔をじっと見たまま御願いします。
「先生に車を」
「わかったよ。それじゃあね」
おじさんはまた笑顔で頷きました。そうしてです。
またステッキを一閃させました。これで二度目でした。
それが終わってからです。おじさんは三度美代子に尋ねました。
「最後の御願いだよ」
「最後ですか」
「そう、三度目の御願いだよ」
まさにそれだというのです。

第二章

「三歩目の御願いは何かな」
「ええと、山田さんの奥さんも先生も幸せになれて」
「うん、美代子ちゃんのことなら何でも適えられるよ」
にこにことして話すのでした。
「お金持ちになるのも。幸せになることもね。どんなことでもね」
「お金は特にいらないですしもう幸せですし」
美代子はにこりと笑って返しました。
「いらないです」
「欲しいものも何でも手に入るよ」
「それもいいです」
「いいのかい」
「はい、それよりもですね」
おじさんをじっと見てです。そして言った言葉は。
「最後の御願いですけれど」
「御願いだね。何かな」
「おじさんが幸せになりますように」
美代子が言った言葉はこれでした。
「それでいいですか？」
「えっ、おじさんがかい」
「はい」
おじさんをじっと見続けています。
「おじさんが幸せになって下さい」
「またどうしてそんな御願いをするんだい？」
おじさんはきょとんとしてです。目をしばたかせて言うのでした。
「自分のじゃなくて」
「私は今で十分幸せですから」
「だからなのかい」

「はい、だからです」
また言うのでした。
「ですからおじさんが」
「そうなのかい。いや、有り難う」
おじさんはにこりと笑ってです。美代子に対して御礼を言いました。
そしてステッキを振りました。けれどここでこう言ったのでした。
「おじさんじゃなくて美代子ちゃんがね」
「私がですか」
「うん、幸せになってね」
そう言って振ったのです。
「これでね」
「おじさんは」
「ははは、おじさんはいいんだよ」
おじさんは笑顔でした。明るい顔での言葉です。
「それよりも皆の幸せだけを御願いする美代子ちゃんが元気になってね」
「わかりました。それじゃあ私今よりも幸せになります」
「うん、そうなってね」
こう話しました。そしてその時でした。
「みよちゃん」
「あっ、お母さん」
扉の向こうからお母さんの声が聞こえてきました。
「お母さん。どうしたの？」
「おやつよ」
お母さんがこう言ってきたのです。
「ケーキがあるわよ」
「ケーキ！？」
ケーキと聞いてでした。美代子は物凄く明るい笑顔になりました。
そうして言うのでした。

「じゃあすぐに行かないと」
「そうだね。行っておいで」
おじさんもにこりとした笑顔で美代子に告げます。
「ケーキ。食べておいで」
「はい。おじさんも幸せになって下さいね」
またこう言うのでした。
「絶対に」
「うん、なるよ」
おじさんも笑顔で言葉を返します。
「じゃあ美代子ちゃんもね。幸せになってね」
「はいっ」
満面の笑顔で応えてです。美代子は部屋から出ました。最後の挨拶も忘れません。
そんな美代子を見送ってです。おじさんは温かい笑顔を浮かべてです。こう言うのでした。
「美代子ちゃんには負けたよ」
これがおじさんの言葉でした。
「全く。魂を貰うつもりがね。逆に幸せになってなんて言われたら」
そして次の言葉は。
「悪魔もどうしようもないよ、全く」
見れば後ろに先が三角になっている尻尾があります。けれどそれをそのままにして。
今は笑顔で姿を消しました。それから美代子はずっと幸せに過ごしました。多くの人に幸せを振りまいて。その美代子が小さい時のお話です。

優しい悪魔　　完

2010・4・29

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6513o/

優しい悪魔

2010年11月1日22時10分発行